釣れ釣れなるままに

２００５年思い出の釣行記 PART.　6

夢はまぼろし

鹿島釣狂

タカノハはやはりまぼろし

☆釣 行 日	平成１７年９月２３日（金）秋分の日２４日（土）			
☆入釣場所	幌別川河口　幌満川			
☆釣　　果	カンカイ	２００	㎜	１
	ハゴトコ	２５０	㎜	４
	カジカ	１５０	㎜	３
	ニジマス	５１０	㎜	１２
	ヤマメ	２００	㎜	１５
	イワナ	２００	㎜	１

幌別海岸でのタカノハ釣りの様子が『北海道のつり（２００４．８)』で紹介された。何度も幌別に通い、季節、場所、潮、天候などを熟知した上での釣果だと思うが、私にも釣れてしまいそうな釣り紀行である。１０月の大会を控えていることもあり下見に行ってみた。

道具仕立ても簡単に気楽な気持ちでと思いつつも結局イカゴロを購入し、使い残したマキエも用意する。午前１１時に家を出て、三石漁港周辺や井寒台の海況を眺め、幌別に着いたのは午後４時を回っていた。

天馬街道への交差点を過ぎた右手に広い駐車帯があったのでそこに一旦停車し、海岸への抜け道を地元の人に聞いてみる。駐車帯の端から海岸に向かって踏み分けた獣道が続いており、そこを通って釣り人が向かっていると言う。また、さらに進んだところに生コン工場があり、そこから鉄道のガード下をくぐって海岸に抜ける道があると言うので向かってみた。運良く幌別川河口付近でタカノハを狙っている御仁がおり、過去に４２㎝を頭に

何枚か釣り上げたことがあるが、宝くじに当たったごとく、そのまぼろしを追いかけていると言う。アカハラにいたっては釣れたためしがないとも言う。唯一の救いはこの沖の所々に根が有り、稀にアブラコやカジカが釣れるということである。釣り大会となると何とも心細い話ばかりであった。

さらに先に進んでみたが、海岸線に釣り人は誰もおらず、幌別川河口と赤川河口の中間点に釣り座を構えてみた。審査規程に満たない小カジカ、小カンカイ、小ハゴトコが釣れたが、それらしきアタリは皆無であった。イカゴロも試してみたがアカハラもいないらしい。午後１０時にはその場を後にし、近浦に向かった。

上近浦は車を駐車しておく場所もなく、溝らしきものも見当たらないために、近浦の大きな舟揚場の端に駐車して仮眠する。３時に目が覚めた。０時の最干潮時を過ぎ、満潮に向かって潮が込んできているにもかかわらず沖まで砂利浜が出ており、その前まで出て打ってみた。しかし、予定通りすぐに潮が満ちてきて撤退を余儀なくさせられる。４カ所ほど移動しながら溝を攻めてみたがアタリが全くない。海藻が無く、ゴロゴロと仕掛けが底を這うばかりであった。エサも底をつき、下見は完敗であった。

渓流へ転向

消化不良の悶々とした気持ちを静めるために、午前８時、渓流釣りへと転向するべく幌満川に向かった。幌満川河口では例のごとく橋の上からシャケを狙う釣り人で溢れていた。幌満ダムに向かうアスファルトの道を上っていくと間もなく発電所があり、そこより先は水かさが急に減り、更に上流１㎞ほどから川に入った。いたる所でシャケの群れが川底を掘り返し産卵の準備をしていた。

瀬ではニジマスやヤマメが釣れたが、そのヤマメは小さいながらもほとんどがクロスケであり、腹をつかむと精子が溢れ出し、フィッシンググローブを白く染めた。遡っていくと、岩壁がせり出して進めなくなったその先に素晴らしい景観の淵が連続して二つ見えた。しかし同時に、その足下には熊のものと思われる真新しい糞が鎮座しており、私の鼻先に野性味のある強い匂いを漂わせてきた。そして、川っぷちの砂地にも糞の持ち主のものと思われる足跡が尾根の方へと続いていた。それは、砂地にもかかわらず、５本の爪跡までくっきりと残したものだった。これまでは、私の歩みにあわせてリュックの後ろでカランカランと響くだけだった鐘がこの時ほど大きく響くことはなかっただろう。

しばらく進むべきか退くべきかを悩んだが、先に見える大きな淵の誘惑に負けて、函の上の切り立った岩を高巻きして進んだ。幌満川独特の琥珀色の清らかな水が、狭まった川縁を勢いよく流れ、岩棚の窪みから一気に淵へと注いでいる。その大きな淵の暗い底には幌満川の流れと共に育った大物が潜んでいそうな素晴らしいロケーションである。一投ごとにヤマメ、ニジマスと続いた。

ゴツン、ゴツンとしたアタリに手首を返すと、キューンとした糸鳴りが初秋の山々に響き渡り、木々の間に染み込んでいく。見えぬ獲物は淵の底にある大岩の隙間をくぐり抜け、

大きく広い淵に出た。そこからは比較的楽なやりとりが続いた。高くしていた足場を低い方に移し、魚を取り込む位置を確認する。長いやりとりがあり空気を吸わせた後はすんなりと手元に寄ってきた。タモを持っていなかったので、斜めになった岩の上を滑らせて取り込んだ。そのニジマスにメジャーを当てると５０㎝を超えるものだった。

陽が高いところに昇ったが、暗い木陰に熊の気配を感じながら急ぎ足で川を下った。

岩見沢釣遊会第６回大会

☆開 催 日	平成１７年１０月１６日			
☆開催場所	浦河港～笛舞港			
☆入釣場所	近浦			
☆釣　　果	**カジカ**	２６６	㎜	２
	ハゴトコ	２６３	㎜	３
	重量	１１４	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	６４３	点	
	順位	４	位	
	累計点	１９	点（②７②⑥⑤④）	

近浦惨敗

２，３日前から荒れていた天候も収まり、大会当日は天気が回復しそうである。昨日からエサ等の準備を進めていたので、のんびりと出発時刻にあわせて集合場所である岩見沢に向かう。しかし、出発時間になってもバスが来ない。新人の運転手が集合場所を正確に把握しておらずに迷っているという。携帯で連絡を取りながら、各会員がこっちの方向、いや、あっちの方向と手分けして捜索するもなかなか見つからない。車まで駆り出してようやく案内することが出来たが出発が小１時間ほど遅れてしまった。１番で釣り場を確保したい仲間の心境がその捜索ぶりに如実に表れていた。

バスの中で情報を伺うがパッとしたものは一つもない。当て所もなく漠然と近浦で降りた時には、狙いとしていた各溝や舟揚場には全て人が入っていた。近浦の舟揚場に大型釣りバスが駐車しており、その釣り人たちであろう。比較的大きな中近浦の舟揚場で釣りをしている人がいたが端が開いており、挨拶を交わしてから入釣した。屯田釣友会のその御仁の釣果はハゴトコのみと言う。アカハラぐらいは来るだろうと考えて打ち返すが、チビハゴトコ１匹のみでアタリもない。

移動することにした。舟揚場という舟揚場には、相変わらずひしめき合って釣り人が入っている。さらに舟揚場と舟揚場の間にも、溝と思われるところには舟揚場からあふれた釣り人が入っている。バッカンを覗かせてもらうとアカハラやハゴトコに混じってカジカも入っており何某かの釣果はあるようだ。

竿を打ち込む場所が無く彷徨っていると、向かいから人が来る。嵐氏だ。彼もハゴトコ

１匹で釣り場を捜しているという。嵐氏を見送った後、人もいないが、溝もなく、魚も望めそうもないところを何カ所か渡り歩いたが、さっぱりだった。潮が引いてきたので砂利原の前に出て、カケアガリを狙って打った。カジカ１匹に何とかハゴトコ４匹がそろった。昨年、嵐氏が大釣りをした近浦の大きな湾洞に移動してみた。カジカやハゴトコがダブル、ダブルできたが、規定の身長には足らず、入れ替えることは出来なかった。

入釣時こそ近浦一帯が霧雨で霞んでいたが、次第に回復し、波、風、潮ともに釣りには絶好のコンデションになった。しかし肝心の釣果の方はさっぱりであった。

三石温泉食堂前で審査を行ったが仲間の表情が冴えない。審査が終わって、海の方を振り向くと、昨日から釣り人が海を掻き回していたことなど知らんとでもいうようにゆったりと輝いている。童話作家の小川未明は「海と太陽」の中で

審査結果

優　　勝	吉田潤二	９７４点（ｱﾌﾞﾗｺ４２７㎜+ｱｶﾊﾗ２９３㎜+２５４０ｇ）	下近浦
準 優 勝	堀内正博	９４９点（ｱﾌﾞﾗｺ２８７㎜+ｶｼﾞｶ　４２０㎜+２４２０ｇ）	白　泉
３　　位	前野達志	９１７点（ｱﾌﾞﾗｺ３７５㎜+ｱｶﾊﾗ３２５㎜+２１７０ｇ）	冬　島
身長優勝	吉田潤二	４２．７㎝（アブラコ）	下近浦

「海は昼眠(ね)眠る、夜も眠る、ごうごう、鼾をかいて眠る。昔、昔、おほ昔、海がはぢめて、口開けて、笑った時に、太陽は　眼をまはして驚いた。」

と綴っている。未明の童謡は物語があるが、私たち一人一人の釣り行にも人知れず物語があったのだろう。その物語の１ページを大物との格闘場面で華やかに飾りたいものである。